# UIFA JAPON NEWSLETTER

No. 103 Mar. 25, 2016

Union Internationale des Femmes Architectes Japon　国際女性建築家会議　日本支部


■主な内容


第 64 回海外交流の会
UIFA 第 18 回アメリカ世界大会出席報告会
この指とまれ
特集：会員の活動紹介～大規模災害に向きあう
　記憶の中の住まいプロジェクト～東松島を訪ねて
　法末（ほっすえ）支援の継続と発展―モバイルキッチンなど
　豊島区の事前復興まちづくり訓練に建築士として参加して
　知ることから始まる地域防災
被災地通信（13）震災５年目を迎える被災地として
映画「波伝谷に生きる人びと」の問題提起

左：コルビュジェ の休暇小屋（Cabanon）のレプリカを背に記念撮影
右：行田の蔵の一つ　（写真いずれも：板東みさ子）

## 2015 年度第 64 回海外交流の会 UIFA 第 18 回アメリカ世界大会出席報告会 64th Intercultural Lecture: Report on 18th UIFA World Congress in the US

世界大会のテーマ；
「女性建築家の建築物と環境への影響」
2015 年 10 月 24 日（土）14:00~16:00
会場：日本大学５号館２階 524 号室
参加者；31 人、(内学生７人)

松川会長より大会の概要説明。参加者 70 名 (15ヶ国)。続いて、国際会議全体の流れ報告と各分担報告（稲垣）；コングレス＠ワシントン DC（宮本）コングレス＠バージニア工科大学（山田）、アフターコングレス（正宗）、プレゼンテーション報告（中島）、レセプションとアメリカの食文化（井出）。各講師の連携でワシントン DC とバージニアに跨る会議の全容が報告された。質疑応答では会場設営責任者と学生から「男性社会の建築界での女性の活躍やアメリカ歴史建築の内部検証、また会議の全貌が理解され新鮮な感動を得た」との感想があり、小川名誉会長の閉会挨拶は UIFA 会長の壮健さとご高齢には驚嘆。（吉田あこ報告、編集部要約）

前面にある調整池を南仏の海に見立てた場所、木立の中に休暇小屋（Cabanon）のレプリカはあった。　（写真：板東みさ子）

## この指とまれ「カップマルタンの休暇小屋（レプリカ）と足袋づくりの街へのお誘い」に参加して Join Us to Visit Le Corbusier Cabin Replica and Gyoda

板東　みさ子　BANDO Misako

ものつくり大学のキャンパスの一角、色づき始めた木立の中に『休暇小屋（Cabanon)』はあった。
カップマルタンの地でコルビュジェが馴染みとなった地元の食堂の主に隣接させてもらったという小屋は、その食堂と扉 1 枚で繋がっていた。それゆえキッチンはない。八代克彦教授の指導のもと、現地での様々な制約も克服し、採寸・スケッチ。それを元に確認申請から始め、家具や金物の一つ一つまで学生達の手で再現したのは、ものつくり大学ならでは。小さくまとめられた住空間。窓の開け方や仕掛け・引手のデザイン・色使い、ディテールのあれこれに囲まれて、愉快に心地よい。

大学の構内を駆け足で見学。学生達の様々な試みが、展示等で伝わって来た。充実した工具や作業場等多々あり、入学したら、したいこと山盛りで学内から出られなくなりそう。

午後は行田の街散策。蔵を改修して設計事務所とされている朽木宏氏から説明を伺い、足袋づくりの産業で発展した街の歴史を今も残る蔵の数々で知る。足袋蔵としての使命を終えた現在、別の目的でと NPO が活動している。蔵の外観の意匠が、夫々なのも面白い。

足袋と暮らしの博物館で足袋が作られる様を見学。ミシンも人の手仕事も道具も、作業工程毎に異なる全くの分業で、流れ作業だ。

手仕事とシステムを産業としていた行田に「ものつくり大学」がある。日本のものつくりの伝統的な素地を持つ地元と、世界に目を向け多くを取り入れる素養のある若者達の学びの場がふれあい、化学変化をし、単なる蔵のある街ではない、何かが生まれそうな気がする。

## 記憶の中の住まいプロジェクト～東松島を訪ねて
## Project Recording Houses from Memories in Higashi-Matsushima

加部　千賀子　KABE Chikako

このプロジェクトは、震災で無くした家の間どりと暮らしについて被災者の方からお話を伺い、図面・文章化した成果品をご本人に贈るという活動です。通称キオスマプロジェクトと呼び、私が女性建築技術者の会（略称：女技会）の代表だった 2012 年、会員 7 名で立ち上げました。今回誌面をお借りして、ご紹介させて頂きます。

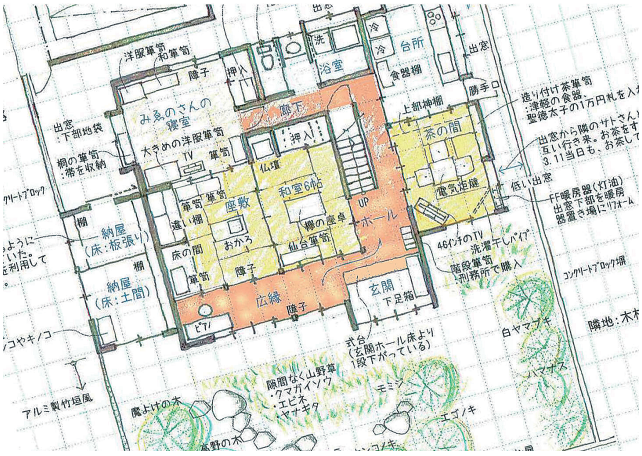
2013 年秋、宮城県東松島市の仮設住宅 2 地区の自治会長 2 人への訪問から始まり、主旨を伝えるチラシの作成、仮設住宅にチラシの配布、宮城県建築士会女性部会（略称：宮建女）に協力を要請など、活動の下準備です。

翌年、東松島市大曲浜 2 世帯、仙台市荒浜地区で 2 世帯、昨年は、大曲浜 8 世帯の聞き取りを実施。8 月には、住民の方 1 人 1 人に成果品を贈れました。聞き取りは、宮建女・女技会の 2 人 1 組で 1 世帯のお話を伺い、記録を取ります。

2015年 4/4 聞取り風景 / 東松島市

贈呈の日、住民の方は成果品を抱きしめて「家の想い出は何も残っていない。これを家宝にする。」「4/4 初めて皆と会えた。今日も皆と会えるから来た。」と。私のこれまでのくもり〈間取り図の再現は、被災者の方のためになっているのだろうか？〉は払拭されました。大曲浜の皆さんは、明るく、たくましい。ご近所の繋がりが濃い。聞き取りの時、間取りが分からなくなると、隣家だった友達 2,3 人がテーブルに集まってきて、窓や家具の位置などをワイワイ議論！他人の家なのに詳しい！驚きです。このご近所力が震災を乗り越え、生きる力になっているように思いました。

人は皆、想い出を持って生きています。とりわけ暮らしていた家での想い出は深く、楽しい事、悲しい事など様々です。被災者の方にとって、それまでの日々の暮らしを思い出すことは、辛く厳しいことと思いますが、『記憶の中の住まい』という場で語り、成果品を見て確認することにより、いつも心のどこかで鳴り響いていたことが整理されると思います。「想い出の仕舞い場所」というのでしょうか。納める事で、一区切りがつき、前へと力強く進める一助になることを私たちは願っています。



記憶の中の住まい　配置図・1 階平面図

## 法末（ほっすえ）支援の継続と発展―モバイルキッチンなど
## Continuing Support in Hossue Village, Mobile Kitchen

宮本　伸子　MIYAMOTO Nobuko

2004 年 10 月 23 日発生の中越地震による被災地支援として、ユイファ・ジャポンの災害復興見守りチームが活動を開始してから（2005 年秋）、丸 10 年が経過した。現地での活動の中心は株式会社法末天神囃子が 2012 年から事業を開始して現在に至っている。

見守りチームでは地域の復興計画の立案や実行を手伝うと共に、初釜（2016 年 1 月も開催）をはじめとするお茶会の開催、100 年を超える民家の調査とそのカルテ作り、集落の情報発信ツールのカレンダー製作（最新 2016 年版）、集落の女性パワーによる集落全体オープンガーデン計画推進、そして集落の味覚を発展させるモバイルキッチンなどを実行してきた。その活動を継続してきたことが被災地支援として、また法末という中山間地域支援としても大事であり、改めてその力を見直したいと考える。

ここではモバイルキッチンについて簡単な報告をしたい。モバイルキッチンは NHK の「キッチンが走る」にヒントを得て、法末の食材をプロのシェフが一味違った味覚として提供し、集落の次世代の味作りに寄与しようとするものだ。2014 年 5 月に山菜を使ったメニュー、同年 10 月に秋野菜を使ったメニューで開催し、2015 年 10 月 18 日に 3 回目となる「モバイルキッチン in 法末 2015」を行い、集落で古民家を改装して移住した田中邸のオープンキッチンをお借りし、集落内外から 20 人が集まった。

この日のメニューは、かぶのポタージュ、さんまの蒲焼ごはん、おろし蓮根餅、コシード（スペイン風豚のトマト煮込み）、色々野菜のピクルス風、かぼちゃの白玉汁粉の 6 品で、地元の素材がどのように変身していくか、「こんな素敵な味になるんだ！」と試食会で舌鼓を打ちました。特にかぶのポタージュは、前日に届けられたカブに赤カブが入っていたことで、赤と白のカブをミックスし新潟県産の牛乳を加えたソフトピンクの見た目も温かなスープができ、講師の斉藤かすみ先生（神楽坂でサロンピルゥファスというイタリアン・フレンチの料理教室を主宰）も大満足という成果でした。

斉藤先生（左）の調理デモンストレーション見学

赤カブ、大根などの地元取れたて野菜

紅白かぶはトロトロのポタージュに変身

## 豊島区の事前復興まちづくり訓練に建築士として参加して
## Report on Training for Town Reconstruction in Toshima Ward

井出　幸子　IDE Sachiko

建築士事務所協会からの要請で、豊島区企画の４回目の事前復興まちづくり訓練—長崎１・２・３丁目地区の住民対象—に、関連専門家たちと共に建築士として参加した。ガイダンス・報告会と４回の「復興過程を模擬体験する」訓練だ。あらましは、第１回目は７グループに分かれまちを歩き、行止り路地やCB塀などの危険な場所や樹木生垣・空地など安全そうな場所を確認し被害をイメージする。第２回目は被災後の住まいや生活を確保するための応急の対策と課題を想定する。第３回目は行政から提示された復興まちづくり方針案を検討し意見書作りを行い、第４回は復興手順と住民意見を反映させた復興まちづくり計画案をさらに細かく課題別（復興屋台村）に意見を出し合うというように、発災→応急対応期→避難生活期→復興始動期→本格復興期という過程をトレースした。

各訓練では、首都大学を中心とした防災コンサルタントらで、住民の声をひき出す工夫を随所に試みる。グループ分けされたメンバーはファシリテーターのサポートのもと、ゲーム感覚のスピードで、いろいろな局面での反応を促される。毎回模造紙にポストイットに書かれた意見が分類・整理（KJ法健在だ）報告される。

そんな中で、印象的な提案がいくつもあった。駅前の既存商店街エリアの再開発にとどまるのでなく、離れたところに拠点をつくり利用する人の流れを作りその沿道に商店を育てていくこととか、かつての池袋モンパルナスのアトリエ村やトキワ荘を育んだ街らしく、画材・文具店のあるまちにせねば、など。

そして参加者は、街のリーダーを事前に育てる必要と、事前訓練の価値を街の人たちに周知したいと語っていた。住民だからこそ語られる言葉には、住民自らの組織力となっていく「力」があること感じた。専門家としてのスキルが未曾有の災害の中でいかほどの役に立つものか、おぼつかないものがあったが、耳を傾ける、否定しない、手探りの方向を一緒に向き合うこと、スキルとはそれに尽きるのかもしれない、とその重さを痛感した訓練だった。

第４回目　復興屋台村に買い物に行こう（復興の進め方と計画）
屋台Ｄ区画整理と住まい再建アトリエ（写真：豊島区）

## 知ることから始まる地域防災
## Knowing Your Area: First Step in Local Disaster Prevention

須永　俶子　SUNAGA Yoshiko

私の住む江東区は高度成長期、日本の工業を支えた地域だった。同時に江東ゼロメートル地帯、ゴミ戦争といったネガティブイメージも引き受けることになった。しかし近年人々の評価が変わってきた。ゴミの埋め立てで区の面積は増え、外郭堤防で輪中状態となった居住地域は、護岸改修と同時に行われた景観整備も功を奏し、人口もこの10年で20％以上増えた。水辺で遊ぶ人々の表情は、昭和30年代まで日常化していた河川増水や、高潮による低地水害を忘れてしまったかのようだ。

行政では逆に増加傾向にある局地的集中豪雨や異常潮位などを睨み、水害についての意識啓発に取り組み始めている。江東区の水害に対するハードは東西地域別々に考えられ、比較的地盤の高い西地域は、水位が上がっても水圧を受けないよう護岸の耐震性を強化、東地域は水門や樋門、閘門で仕切り、周辺地盤より約2m水位を下げた。区配布のハザードマップでは、堤内地に２週間以上水が滞留する可能性、備蓄の必要性、建物の３階以上へ避難なども示されている。東地域が増水した場合には、住民に新しく造成された高地盤の豊洲、有明、辰巳、夢の島など南への避難を勧めている。

記載されているのはここまでで、どう避難すればいいのかは地域住民が考える必要がある。私が理事長を務める「NPO江東区の水辺に親しむ会」の防災活動は、文字通り水辺に親しむことから始めている。水辺イベント開催をきっかけに、環境を知り、背景を知り、水辺活用を考え、ハードまで言及することを目的としている。また避難に有効なのは船と考え、門前仲町の防災船着き場から広域避難場所の東京海洋大学へ船を出した。物見遊山が、避難訓練なのである。船を使った防災訓練も実施した。マンション前の川沿いから乗船し避難をする想定。船で救援物資を届けるといったことも行った。高い耐震護岸の上に、船から物を持ち上げられるかも実験してみた。簡単に扱える小型ヨットアクセスディンギーの講習会も実施している。水辺を実際に使うと意識が変わり、いざという時に役立つ。防災はまず江東区がどんな地域かを、親しみながら知ることから始め、自助、共助、公助につなげたいと考えている。

扇橋閘門の閘室側（東地域の水位）から、隅田川側（西地域の水位）を望む。
* 赤いラインで約２mの水位差を示す。

No. 103 Mar. 25, 2016

Union Internationale des Femmes Architectes Japon

UIFA JAPON 事務局
〒 102-0083
東京都千代田区麹町 2-5-4
第 2 押田ビル ㈱生活構造研究所内
Phone: 03-5275-7861 Fax: 03-5275-7866
E-mail: uifa@LIQL.CO.JP
URL: http://uifa-japon.com
発行 2016 年 3 月 25 日

THE SECRETARIAT OF UIFA JAPON
c/o LABORATORY FOR INNOVATORS
OF QUARITY OF LIFE
DAINI-OSHIDA BLDG.
2-5-4, KOUJIMACHI,CHIYODA-KU
TOKYO, JAPAN 〒102-0083
PHONE :+81-3-5275-7861
FAX :+81-3-5275-7866
URL :http://uifa-japon.com

## 被災地通信（13）

### 震災 5 年目を迎える被災地として　岩井　紘子
### Report from the Disaster Area (13)　IWAI Hiroko

1 月 22 日（金）東北大学で『21 世紀文明シンポジウム「減災」—東日本大震災から 5 年—』が開催された . 震災 1 か月後即設置され復興構想会議の座長、五百旗頭 ( いおきべ ) 真氏は語る、陸前高田とか女川など全面壊滅地は大土木事業による新しい安全なまち創造型、大船渡とか石巻など沿岸部被災地は高台や内陸移転を試みる多重防御復興型、岩泉や七ヶ浜等被害限定地は迅速な復旧復興型に 3 種別されており、この 5 年の集中復興期最終年度の今年、大土木工事が雄叫びを上げているとの事。反面この施策は、地域性を無視した官僚主導の前例踏襲に過ぎず、この地域の現実的な人口減少を見据えていないのでは、と疑問を投げかけたパネリストもいた。かのスマトラ地震では 20 万人、この大都市を含む広域被災の日本は 2 万人の犠牲者で済んだ、何とスバラシイ、が世界での評価とのこと。次なる南海トラフとか、首都直下型地震という大災害への国家的危機管理体制を問う東日本の 5 年目という意なのか。被災地心情とかけ離れた中央目線のシンポジウムであった。

シンポジウムのポスター

あれから 5 年、官民挙げての捜索も空しく、遺体検証もない遺族が今なお癒えない心の傷を抱え続ける中、インフラ整備、生活再建と言う名の復興施策が進む。阪神大震災から 21 年、あの大都会ですら 5 年目頃にしてようやく復興と言えるステージになったという。東北も今からなのであろうか。創造的国土「東北」の夢のある復興を願うのみである。

## 会員のおすすめ映画

### 映画「波伝谷に生きる人びと」の問題提起
### *The People Living in Hadenya:* A documentary
### 渡邉　喜代美　WATANABE Kiyomi

監督の我妻さんはいわく「『被災地』と呼ばれる場所にかつてどんな人の営みがあったのか、地域の“絆”を美化することなく、時代の変化という波に晒されながらも、土地に根を張り、地域とともに生きる生活者の姿を捉えた」という。奇遇にも被災後頻繁に訪問している被災前の南三陸町戸倉・波伝谷を民俗学的視点で記録していた映像の映画化であった。それは、被災後の映画化であるがために復興を根本から問い直す趣がある。復興にあたって、災害と人・風土は、被災前の暮らしは紹介されない。そして被災後はハード系優先の議論と複旧が優先され、そこにどんな暮らしがあったか、風土は人びとをどのように育んできたか、再生に向けてこれまでの暮らしの積層はどのように復興されるのか、ほとんど議論することなく、海と隔絶する防波堤や高台移転が進む。例えば、かつて当たり前にあった川や海辺の親水とまつり、コミュニティといった視点は、地域の人々が主張するも埋没させられる。復興に一番大事な暮らしの再生はハード先行の復旧から切り離されてしまう。渡邉も提起する。災害復興のソリューション（キーワードその 1）「人・風土」。和辻哲郎“風土とは単なる自然環境ではなくして、人間の精神構造の中に刻み込まれた自己了解の仕方に他ならない”のだ。

公式サイトにて 3 月以降の上映予定掲載中 hadenyaniikiru.wix.com/peacetree

今や、写真の高台の農地は、高台移転の住宅地に変身！また下界の風景は一変しています。

## ■役員会報告

**2015 年度第 4 回 11 月 25 日**　第 64 回海外交流の会世界大会報告総括　再アンケート調査その後　被災地支援について：どこでもカフェ、だれでもフォトグラファ　この指とまれ「カップマルタンの休暇小屋（レプリカ）と足袋づくりの街へのお誘い」報告　UIFA・JAPON 名刺作成準備　NL102 号発刊

**2015 年度第 5 回 2016 年 1 月 29 日**　第 24 回 UIFA・JAPON 総会準備　2016 年法末初釜開催報告　だれでもフォトグラファ撮影は続行　UIFA・JAPON 名刺作成準備　再アンケート調査その後　会費納入状況　NL103 号広報用配布先検討

## ■編集後記

法末に通い始めて 10 年の集落の移ろいに思いを寄せる今日この頃（宮本）／わが街は細分化された敷地に 3 階建木造がひしめき合う新たな木密の街に変貌し始めている。敷地面積規制のある地区計画施行（今春）前の駆け込み建て替えの作る景観だ（井出）／ 3.11 から 5 年！日常にある者からは想像しがたい非常時は続く！と被災地の人は言う（渡邉）／踊る子供のパワーを感じたエンターティメントクルージング（須永）／暖冬で冬咲きしてしまったバラ達は通常通り春に咲くのか？逞しく新芽用意し始める。（神村）／ひと雨毎に花が咲く、春（薄井）